

ラッキーピエロ

酪農家 吉川友二

今年小学五年生になった末っ子の光里が全道の陸上競技大会に出場した。大会は七月十五日と十六日(二〇一八年)函館で開かれた。

妻と光里は大会の前日入りをしたので、私は後から一人で応援に向かった。

地球温暖化ガスを出さないJ Rで行こうか、旅費の安くなる車で行こうか迷うが、CDの朗読本を聴くために車で行くことにする。ここ二年ほど車を運転しながら、朗読本を聴くことが楽しみになっている。函館に行く時には、村上春樹氏の『ノルウエーの森』をちょうど聞き始めたところだった。

朗読本を聴き始めたきっかけは、村上春樹氏の『ねじ巻き鳥クロニクル』の英訳の朗読CDを、たまたまネット上で格安で見つけたからだ。普段使うことのない英語の錆取りにと買ってみた。『ねじ巻き鳥クロニクル』は村上氏の中で一番好きな作品で、すっかり朗読本にはまってしまった。それから村上氏の『世界の終わり』とハードボイルドワンダーランド』、『IQ84』と聞き、そして『ノルウエーの森』にたどり着いた所だった。

ちなみに、今はハリーポッター・シリーズの二作目である『秘密の部屋』を聴いている。先生だけで五人くらい、生徒も五人くらい、それにへびにクモに妖精(ドビー)、幽霊数人(マーテルなど)まで出てくる。これだけの登場人物の声を使い分ける朗読者の芸にまず感動してしまふ。ハリーポッターの朗読本を聴いていて、朗読本は本とはまた別の芸術だと感じる。

そして朗読を聴くことの楽しみは、朗読は黙読よりも時間がかかるので、小説をゆっくりと味わえること。また、自分が読んだときに思い描いていた登場人物像と、朗読者が表現する登場人物が異なることである。それと車の運転中に眠くならないのが助かる。

函館へと高速を走る軽自動車の中で『ノルウエーの森』へと入り込んでいく。ガソリンが足りなくなり、大沼の手前で高速を降りる。暗闇が迫っている。運よくまだガソリンスタンドが開いている。ここから先は、下道で行くことにする。

五号線を走っていると、ラッキーピエロの看板があらわれる。ラッキーピエロは道南にあるハンバーグレストランである。車を停めるが、駐車場は車がいっぱい、注文を待つ人の行列ができていく。また帰りに寄ろうと思いい、真つ暗になった道に行く。

ホテルと大会のある陸上競技場は五稜郭公園からさほ

ど離れていないところであった。翌朝、ジョギングで五稜郭公園を走るが、大学時代を過ごした寮の場所をすっかり忘れて見つけれなかった。公園の近くにもラッキーピエロができていた。

光里の応援を終わって一人で帰路につく。光里たちは明日出場する仲間の応援のためにもう一日函館にいる。帰りは急ぐ旅でもないので、下道で帰ることにする。大沼のラッキーピエロに立ち寄り、お土産でも買っていかうかと思つて店内に入る。レジには注文のために並ぶお客さんの行列がお店の外にまで伸びている。お土産を買うのはあきらめることにする。次第に暗くなっていく道をまた『ノルウエーの森』の中へと入っていく。

スマホのグーグルナビが指示する道に少し不安になりながら、すっかり暗くなった道を行く。洞爺湖の黒々とした湖面が現れる。『ノルウエーの森』もいよいよ最終局を迎えている。多くの登場人物の自死があり、聴いていてつらい。

先はまだまだ長い。高速を使うことにして、支笏湖の手前で右折をして、ホロホロ峠を越える。白老インターから高速を運転中に『ノルウエーの森』を聞き終える。家にたどり着いて、ヤフー天気予報を見ると乾草が刈れそうな天気予報に変わっていた。

悪天候が続いて草が刈れずに、いつもの年よりも、今

年は丸一か月一番草が遅れた。頸椎の手術をして退院をした後も首が痛かったので、草の刈れないお天気感謝である。このお天気のお陰でこころ安らかに休むことができた。

明日の朝からいよいよ一番草が始まる。

今からちょうど十年前の二〇〇八年、開町百年の年に『噴煙』の原稿を初めて頼まれた。その時にラッキーピエロが思い浮かんだ。しかしうまく表現できそうもなかったので、書かなかった。

ラッキーピエロは、結婚記念日の家族旅行で函館に出かけた時の思い出である。記念日は五月十九日で、子供たちがまだ小学校へ行く前の話だが、何時だったろうか？ 函館に出かけることにしたのは、家族でお付き合いのあった友人が大沼グリーンパークの宿泊券を譲ってくれたからだ。

函館は大学の二年半を過ごした土地。大学から歩いて一時間ほど離れた五稜郭公園の近くにある寮に住んでいた。学生の時から十数年ぶりの函館である。足寄で一番遅く花を咲かせる私の牧場の桜は記念日頃に満開になる。ジョギングコースであった五稜郭の桜はゴールデンウィークに満開になっていたの、桜はもう散ってしまった。だろうか。

牧場の仕事は二月の終わりから牛の出産ラッシュが始まる。三月、四月は夜の出産の見回りがあり、枕を高くして寝ていられない。そして雪がとけると放牧の準備が始まる。記念日の旅行を楽しみに冬を頑張っていた。

グリーンピアのログハウス調のコテージに到着して荷物を置く。コテージには自炊施設があったが、夕食をこれから作るのも大変なので外で食べることにする。

グリーンピアの道を出るとすぐに、ラッキーピエロというお店があった。まるまると太った陽気なピエロの絵が描かれている。あちこち探さずに一番近いこのお店で食べることにする。

外にある木のベンチに腰を掛ける。道南のあたたかい春の風に、骨まで伸びるようだ。春の夕暮れまではまだたっぷり時間がある。

翌日、水産学部のキャンパスに立ち寄ると、八重桜の大木は満開を過ぎて、花で重そうな枝から、花が舞い降りていた。

この函館旅行に長女は一緒にいただろうか？妻に聞く。「大沼のロッジで子供たちがはしゃいでいた記憶があるので、いなかったと思う」とのこと。長女は二歳になつてすぐに亡くなった。ラッキーピエロでの思い出は、なんの憂いもなく、ゆつたりと時が流れている。

六月十八日から二十六日までの十一日間、頸椎症で入院をした。

退院をしてから、久しぶりに会う友人に入院の話をしたら、「入院は生まれてから一度もしたことがない」と言われる。「そうだよねえ、入院なんて一度もしないのが当たり前だよ」と思う。

退院をしてから、なんで頸椎症になったのだろうか？原因が分からなければ、また再発をして手術にならないかと不安になった。

友人と話をしている時、「許せないという思いからではないか」とふと思う。

五月のある朝、搾乳の始まるときに袖まくりをしようとしたら、左の袖をまくることが出来ない。手がかじかんでいるのだろうか？整骨院に通ったりして一か月様子を見るが右手の力が入らなかつた。

帯広の厚生病院で頸椎症と診断される。頸椎から手に行っている神経が頸椎で圧迫されているのだそうだ。先生に頸椎を広げる手術を勧められる。「私ならすぐに手術をする」と先生に言われて、入院手続きをして帰る。

入院中に『Love Is Letting Go of Fear』をキンドル（デジタル書籍）で読んだ（『愛とは、怖れを手ばなすこと』G・ジャンポルスキー・サンマーク出版）。退院した時に、「自分はバージョンアッ

プして病院から帰ってきた」と言って、入院中にお世話になった人たちにこの文庫本を配った。

病院で読んだこの本は一回読んだ後に、ノートにメモを取りながらも一度読んだ。それにもかかわらず、ほとんど内容を忘れていたなかで、覚えていることがある。「病人は他人のために仕事をしなさい」という話である。次の日から、誰もいない早朝に病院の前の駐車場のゴミ拾いを始めた。実践をしたことは忘れませんね。

病人でなくても、自分の欠点（病的なところ）を気にしたり、自分が許せない・人が許せないと言っているよりも、人のために何ができるかを考えていた方が健康で長生きできそうだと。

『愛とは、怖れを手放すこと』という題名の意味は、私たちは愛そのものである。その本来の愛になるためには、怖れ（価値判断）を手放すだけでよいという意味である。怖れを手放すことを「ゆるし」という。ゆるしが愛（心の平和）を得るただ一つの方法である。心の平和（愛）とは、相手（自分）から何かを望んだり、相手（自分）を変えようという願望を捨てて、無条件に相手（自分）に与えることである。

「この本は必要な人に、必要な時に届く本である」という言葉を読んで、自分にもそれが起きたと思った。

退院をしてから不思議な体験をした。何回も繰り返し

聞いていた斎藤一人さんのCDの中で初めて聞く話があった。（このCDは本別町のセブンイレブンで百円で売っています。）

その話というのは、「因果の解消」のお話です。例えば子供の頃の家庭内暴力などで、全く悪くないのに被害者になった人がいます。その人が相手が悪いと相手を責め続けても人生は良くならない。因果とは「前の人生で自分のやったことが、いま自分に返ってきている」こと。その因果は起きた時点で解消されている。それを知って「ゆるす」こと。ゆるすと魂が成長する。魂が成長すると、神様がすべてを解決してくれる（『斎藤一人 奇跡のバイブル』舛岡はなえ P.H.P.）。

家族のことになると、ついつい相手を責めてしまう。一人さんによると、家族はお互いにソウルメイトだそうです。ソウルメイトとは魂を向上させるために、役割を交代して何度も生まれ変わって出会う人のことです。人は魂の成長のために、何度も生まれ変わります。「魂の成長」とは、自分の魂は神の愛なんだと気づくこと。それに気づいたら、目の前の人に「自分も、あなたも愛である」ということを、どうやって表現していくかです。

一人さんの言葉を『内に紹介します。』

『神様がどういう形で魂のステージを上げるかという。その人に困ったことを与えるんです。』

そのときね、

「本当にこのことで自分は困るのだろうか」

と考えるんです。(略)

困ったことを、困っていないと気づくこと、これこそが修行なんだね。そして困ったことは、魂のステージを上げるための神様からのプレゼントなんです。

自分を愛している人、自分を大切にしている人は、仕事でも結婚でも必ず成功します。自分を大切にしている人って、周りの人も大切にしてくれるんだよね。神様も喜んでくれて、あなたを守ってくれるんです。』（『齋藤一人 この先、結婚しなくてもズルいくらい幸せになる方法』舛岡はなえ 宝島社より。）

今必要なのは、困っていないと気がつくこと、ゆるすことだろう。頸椎症が再発しようが、しまいが、関係なしに。

つらくて、もう一度しっかり聴くことができないでいた『ノルウエーの森』だが、半年以上たった今、もう一度しっかり聴いてみたいという気持ちになっている。

主人公が、恋人の自死の後に



放浪の旅にでる。そんな風に人の死を深く悼むことができる人はどれだけいるのだろうか？それができない世の中の多くの人たちに代って主人公が深く悼んでくれているかのようだ。それがかつて『ノルウエーの森』がミリオンセラーになった理由なのだろうか。

朗読本でなかったら、これだけ深く物語の森へと入れなかったかもしれない。そしてそれが函館への旅の風景と重なり合っている。

追記…いま『愛とは、怖れを手放すこと』にある水島広子氏の解説を読んだ。私なりにその解説を解釈させてもらうと、「愛」＝「心の平和」＝「自分の中にあるポカポカとあたたかいものを感じること」である。ところがポカポカとあたたかい時に自分は愛の存在である。愛とは何かを「する」のではなくて、こころポカポカと今ここに「ある」ことなのだろう。

